

絵本に見られる 現代の親観

武 田 京 子
(岩手大学 教育学部)

1. はじめに

子どもが与えられる文化財の一つである絵本には、テキスト作者、イラスト画家、編集者、読み手などの複数の大人が深くかかわり、複数の意識が反映される。第51大会(1998)から月刊絵本を資料として、社会状況の関連を分析し社会の動向が作品のなか反映されていることが分かった。

今回は、単行本絵本にも社会状況の変化が影響を与えているかどうか、をこどもを取り巻く身近な環境である両親に視点を置き分析を試みた。

2. 研究の方法

戦後の意識改革がほぼ落ち着きを見せた1970年代以降制作された創作絵本のうち、親をテーマにした作品を概観し、子ども、父親、母親の扱われ方を分析する。

3. 結果及び考察

(1) 社会状況の変化

①少子化 1989年の1.57ショック以降も合計特殊出生率は低下している。子ども数の減少の理由は、「少なく生んで大切に育てる」「仕事と子育てを両立させたい」「結婚や子育てという責任から逃れたい」など様々なものが考えられる。子ども数の減少は、過保護・過干渉による、無気力な受身の子ども像を生み出しやすい。

②核家族・小家族化 両親と子どもからなる家族の増加は、家族構成員の減少(小家族化)をもたらした。祖父母との日常的な接触が無くなり、少人数間の単純で濃密な人間関係が生まれるようになった。

③情報化の進展 現在では、テレビの無い生活は考えられない。インターネット等の電子メディアの普及によって、情報は瞬時に行き渡るようになり、テレビに映し出される世界が「あたりまえ」のこととして受け取られるようになってきている。また、音声と画像が同時に提供されることによって、各自のイメージを形成する機会が減少し、想像力を養う機会を失っている。また、人とのかかわりをもたずに情報を得るとも可能にしている。

④女性の社会進出 高学歴社会の進展に伴い女性が職業を持つことは当たり前になった。子育てと仕事を両立させようとする女性が増加するとともに、子育て及び家庭運営に男性の参加が求められるようになった。

⑤産業社会の成熟 有職母親の増加は経済的な豊かさをもたらした。現代の子どもは、豊かさのなかに生まれ育つ。ものごとの全ては経済的な視点からの解決が可能のように受け取られることが多くなった。

⑥父親・母親観の変化 性別役割分業観の解体と女性の社会進出に伴う有職母親や単親家庭の増加によって、家庭内における両親の役割が大きく変化しつつある。新しい親のあり方像が求められている。

(2) 親を主題とした絵本作品の概観

単行本絵本の出版状況を見ると、親が作品の全面に出てくる作品が目立ってくるのは1975年以降である。

① 1975年以前(専業主婦が家庭を守る)

1960年から70年代は、現在も子どもたちの心をとらえている作品が多く生まれた。『ぐりとぐら』(1963)、『こぐまちゃんえほんシリーズ』では、子どもだけで成立する世界でストーリーは展開している。『たろうのおでかけ』(1963)にみられるように、親が登場することはあっても主人公ではなく、子どもには家庭があり、母親が家事を行い子どもを見守る姿は当たり前の事として受け取られていた。

② 1975年から1980年代(兼業主婦の登場:性別役割分業の揺らぎ)

核家族化の定着は、子育てにおける母親への責任集中と家庭内及び社会からの孤立化をももたらし、育児ノイローゼの遠因となった。

『おりょうりとうさん』(1976)、『せんたくかあちゃん』(1978)は、ともにさとうわきの作品である。前作品では、料理を楽しむ男性を描き、後作品では、主婦業を女性の自己実現の一つの方法としてとらえている。二作品を並べると矛盾しているようにも受け取れるが、家庭内の仕事は家族みんなでや

ること、やるならば義務ではなく楽しんで行なおうとする作者の意図が見える。

『おとうさんになったおかあさん』（1980）専業主婦の母親と係長の父親が役割を交換する話である。

男女雇用機会均等法が制定された、1985 年前後はそれまでの性別役割分業論では割り切れない状況が展開するものの、実生活面では受け入れられない状況下にあった。このことはこれらの絵本が子どもの目からみた話ではなく、第三者が客観的に描いているところからも分かる。

③ 1990 年代以降（親性の再検討）

T Vゲームに代表される児童文化財のおとなとの共有化は絵本の分野にも当てはまり、多方面からの作者の参加や「癒し」という大人を対象とした新しいジャンルの拡大をみた。

経済、教育、家庭、国際面においても先行きの見えない不安感が充満している。子育て支援策は特に効果があったとはいえない。個の尊重が進むなかで、家族のあり方や個人の生き方の多様性が容認され、マスメディアの報道によってさらに強化される傾向にある。子どもを自分の分身ととらえるよりはむしろ別の独立した存在としてとらえる母親も増加してきている。また、個の尊重が家族という単位に適応されると、父性・母性という概念よりも次の世代を育てるという使命を持った、親性へ関心がもたれ、特性や個性による共同育児や役割分担がみられるようになった。また、21 世紀に向けての新しい家族のあり方がとわれ、政府の策定する「男女共同参画型社会」の実現のためには、「育児も仕事も」と孤軍奮闘していた女性達から、お手伝いではなく、主体的に家事に参加する男性・育児をおこなう父親が求められている。家庭の理想像は型どおりのものではなく、父親と子どもが生き生きと生活を楽しんでいる様子を描いた作品がつくられている。

（3）作品にみる現代の親像

①個人の生き方を模索する母親 『これが、ぼくのかあちゃん。』（1995）は、有職母親（在宅・画家）が主人公である。夫はサラリーマン。小学生の姉弟の核家族である。おしゃれをして、すましているとかっこいい母親は、実はそそっかしく、片付けはできず、張り切りすぎてギックリ腰になる。仕事ばかりでなく趣味（スイミング）をもっている。父親の家事への参加の様子は描かれていないが、子ども達はそんな母親を理解し気遣いを見せる。『いつてらっしゃーい。いつてきまーす』（1983）の仕事と家事でつ

かれっきった母親像とは違い、仕事以外の個人の生活を楽しむ姿が見られる。

②家庭の内外でがんばる父親 『おとうさんはウルトラマン』（1996）父親（サラリーマン）、母親（専業主婦）、子ども（男児）の核家族。父親の職業はウルトラマン。父親は子ども時代には憧れのヒーローであったウルトラマンに、自分自身が成長してなった。ウルトラマンは外では強くどんな敵にも負けない力強いヒーローである。しかし、家に帰れば家庭のヒーローにならなければならない。現代家庭のヒーローは、家庭と仕事の両立ができなければならない。たとえ妻が専業主婦であっても子育てに積極的にかかわらなければならない。仕事でふらふらになっても、子どもと遊び、戦いには負けてあげなければならない。かわいがることだけが子育てとはいえないが、今までは母親任せにしていた子育てに積極的にかかわろうとする父親像が見える。読者として子どもを想定しているのではなく、大人を意識しているところが感じ取れる。

③『パパいっぱいだっこして！』（2001）父親（職業は不明）、母親（専業主婦）、主人公（姉）、弟の核家族。主人公は父親に対する不満（トイレが長い・口うるさく注意す・一緒に遊んでくれないなど）をもっている。今のパパは嫌いだからもっとやさしい父親に出てきてほしいと思うようになる。主人公は、父親にやさしさを求めている。具体的には、「絵本を読んでほしい・お馬さんをしてほしい・たかーいたかーいをしていっぱい抱っこをしてほしい」という内容である。なきながら眠ってしまった主人公を父親はやさしく抱きかかえ、木の下で眠らせる場面で終わっている。抱く、絵本を読むなど以前は母親の仕事と考えられていたが、父親がしてもおかしくないし、子どももそれを求めている。現代の子育てにかかわる役割分担は性差や社会通念から派生するのではない。欲求や行為にかかわる人間関係のなかで行なわれることを表現している作品である。

4.まとめ

1975 年以降の父親母親の登場する創作絵本には、社会における家族観が反映されている。

- * 個人の生き方を模索する母親
- * 性別役割分業の崩壊
- * 離婚・単親家庭などのタブーの消失
- * 父親の家事・育児への積極的参加
- * 親の苦労を容認する視点